

青年島崎藤村の変身

吉村善夫

島崎藤村については「重厚で謹厳な人格者」というイメージが定着している。けれども彼ははじめからそうだったのではなく、その青年時代にはむしろ逆に軽薄な才子と見られていた。この人格的変身の動機と過程を解明するのがこの論文の目的である。

藤村が明治学院に在学中、突然その生活態度を豹変したことは、ほとんどすべての藤村伝記書に記されているところであり、藤村に関心をもつ者にとっては周知の事実であると言えよう。すなわち以前はしゃれた洋服を装い、才気煥発で、教室でも教会でも、男女ミッシェンスクール合同の文学会でも華かな活躍をし、その出過ぎを諷して「いかけ屋の天秤棒」というあだ名をつけられていたほどであったのに、ある時から突然に豹変して、服装を質素にし、学業を怠って教師の質問にも答えず、友人を避けて口を利かず、誰にも自分の居所を知らせず、そのために今度は「仙人」というあだ名をつけられたということである。これは藤村自身が『吾が生涯の冬』(明治四〇年三月)という談話の中で語り、『明治学院の学窓』(明治四二年八月)というエッセイの中でもふれ、小説といえ伝的色彩の濃い『桜の実の熟する時』(大正三年五月―七年六月)の中にも記していることであるし、また当時の学友である戸川秋骨の『『明治学院』時代』(明治四〇年)や『凡人崇拜』(大正

一五年二月)および馬場孤蝶の『明治文壇の人々』(昭和一七年一月)の証言もあるので、確かな事実を見て差支えなからう。しかもこの豹変は、藤村が政治家志望から文学者志望に方向を転換するきっかけともなったのであるから、藤村の文学的生活にとって非常に大きな意味のある事件であると思われる。

ところで、問題はその豹変の原因である。『吾が生涯の冬』は、それが小倉鋭喜という級友の忠告によって自分の生活を反省した結果であると記し、さらに『桜の実の熟する時』はその忠告の具体的内容として、当時彼が同信の友として交際していた年上の一女教師との間に「浮名」を立てられていることを告げられたとしている。ほとんどすべての伝記書はこれを事実として採用している。さらに馬場孤蝶は藤村が高等学校の入試に落第したという噂を聞き知って、藤村の豹変を――「高等学校の試験を通過し得なかつた面目なさを覆ふ手段であるかのやうな気がしてしかたがなかつた」と語っているところから、これをも藤村豹変の一原因に教え入れている伝記書もあるが、これとても主原因は小倉鋭喜の忠告に依っている。

が、これらの諸原因を検討してみると、腑に落ちない点が少ない。第一にいわゆる「浮名」の相手である女教師繁子のことであるが、藤村に関しては実証的研究が盛んで、彼の生涯はもろろん

彼をとりまく諸関係の些事にいたるまで戸籍調べが進んでいるにもかかわらず、私は寡聞にしてこの繁子なる人物が誰をモデルにしたものかということにふれた研究を見たことがない。藤村のこの約交は彼の文学志望を推進する最も大きな契機となったのであるから、この約交の原因をなしたこの一女教師のことは、実証的な藤村研究者にとって見逃しうるほど無意味なものではあるまい。それにこの人物は、『桜の実』によると、藤村より五つ年上で、浅見先生〔木村熊二〕の牧する教会〔高輪台町教会〕の信者、しかも礼拝時のオルガン奏者であり、同時に浅見先生が教頭をしていた学校〔頌栄女学校〕の教師兼舎監であったのであるから、そこに多少の小説的潤色があるにしても、これだけ条件が揃えば、これを割り出すのはきわめて容易であるはずである。であるのにそれがなされていないということとは、この人物が実在しないことを意味するのではないかと推測される。それにこの「浮名」に対する主人公捨吉〔藤村〕の反応もはなだ不自然である。この事件から一年半ほど後に繁子が他の男と婚約したことについて、彼のある同級生がミッシェンスクール風の男女交際にも、今迄の習性のない婚約ということにも一切反対の態度を示したのに対し、彼は——「しかし君、可いぢやないか、男と女が交際したつて」と何気なく言ってみようとした(七)という。とすれば、彼自身の場合も、ことにそれがあらぬ「浮名」であるのであるから、なおさら同様の反駁をしてもよかりそうなのに、この場合には反対に繁子とは二度と会うまいと決心したという。これは前後相矛盾し、繁子なる人物が無理な設定であることを暴露するものであろう。また藤村に忠告した小倉鋭喜なる友人はパンカラ党の硬骨漢で、当時の藤村とは対照的な人物であつたらしいから、藤村に忠告するにしても、「浮名」云々を種にするまでもなく、い

つてもそれをする事ができたのではないかと思われる。以上のような諸点から見て、繁子なる人物は藤村の虚構ではないかと疑われる。私がこの疑いを裏づけるために実証的探索を行わないのは、怠慢として責められるからも知れないが、もともと何ものかの実在を実証することはできても、その非実在を立証することは原理的に不可能であるし、また実証的研究には素人の私がその道のエキスパートたちを凌いで新事実を発見し得ようなどとは自分でも期待できないので、ここではあえて右のような推定に止めた。また今のところそれで十分であると思つてゐる。では、なぜ藤村が繁子なる人物を虚構したかという理由が問題になるが、それはこの作品を青春小説らしく色づけるためという理由のほかに、もっと重大な理由は、真の原因を隠して小倉鋭喜の忠告を強く印象づけるためではないかと思われる。

次に「浮名」を抜きにした小倉の忠告であるが、これは藤村が実名まで出しているのであるから、事実であることは間違いない。けれどもその忠告によって藤村が約交したというのは、やや腑に落ちない。第一にその忠告が行われた時期であるが、『桜の実』によると、それは学校へ入ってから一年半か二年ばかり後のこと(八)であるから、明治二二年の春から夏の間に行われたことになる。また逆に計算すると、小説の冒頭に捨吉が偶然俚上の繁子に出会ふのは、基督教夏期学校のあつた年、すなわち明治二三年の初夏(九)の初夏らしい白い肩掛(九)のことであり、その時彼はもう一年あまりの間繁子を避けて過している(一〇)のであるから、そしてそれは友人の忠告にもとづくのであるから、その忠告は二二年の春頃に行われたということになり、入学後の計算と合致する。ところが、藤村は二二年の二月から九月の新学期まで学校を休み、公立学校の別

科に通って、高等学校の受験準備に没頭していたのであるから、(二) (もちろんこのことは小説に記されていない)、この欠席期間中に忠告が行われたとは考えがたいので、二二年の春というのは、小説上の虚構であると断定してよい。談話『吾が生涯の冬』では、入学してから二年ばかり後にこの忠告がなされた(三) ことになっているから、それは二二年の九月以降ということになる。これは、この九月の新学期に藤村が再び通学しはじめた時、彼は約変していたという、馬場孤蝶(前出)や戸川秋骨(前出)の証言とはほぼ一致する。そして、長い間休んだ後で再通学しはじめた時は別人のように変わっていたというのは印象深いことであろうから、孤蝶や秋骨の記憶に間違いはなさそうである。従って藤村の約変は二二年の九月、新学期からと断定してもよさそうである。とすると、小倉銳喜の忠告は、『桜の実』の二二年春よりやや遅れて、同年九月新学期が始まる直前ということになる。けれども、二月からずっと休んでいる友人をこの時期に擱えて忠告するというのは、やはり不自然の感を免れない。そこにまだ納得しかねる点はあるが、初めにも言ったとおり、小倉の忠告があったことは事実であろう。けれども、それが事実であるとしても、その忠告が藤村の言うほど決定的な役割を果たしたとは考えられない。というのは、ほかにもっと有力な因果関係が隠されているように思われるからである。

その有力な原因とは彼の恩師木村熊二の戒告である。神津猛は明治三六年一月六日の日記に、当時の小諸義塾塾長木村熊二から同義塾の新任教師島崎藤村の経歴を聞かされたとして、これを書きとめている。少し長いが、藤村の約変に関する重要な資料と思われるから、関係する部分を引用しよう。――「島崎氏は若い時代に於て、木村氏が女塾をやっていた時に氏の世話になっていた。非常に才氣

のある人で、(中略)その後、氏の性質が余り才氣に走り過ぎるので、木村氏も困って、ある時島崎氏に向って『少し都合があるから下宿にでも行って呉れ』と申渡すと、伶俐な島崎氏はその場で木村氏の意を悟って、自分は何の落度もないのに断られるのは、余り才氣を振廻し過ぎる為だと思つた様であつたが、暫くして近所の寺に移つた。その頃、島崎氏は明治学院に居たが、才氣はあるし、学問もよく出来るので、学校の事はそっちのけにして自分の好きな事許りやっている。ある時、木村氏が氏に向って、『今後はどうするつもりだ』と言つたところが、『高等中学に入るつもりです』と答えるので、『それもよからうが、然しそれにしては君の今の様に勉強せんで高等学校には入れぬぞ』と言つたところが、『先生それは余りです、いくら私でも高等学校位入れぬことはありません』と言つていたが、愈々入学試験になると見事落第したので、木村氏を訪ねて『今後は何でも先生の言に従うから、今回のことは実に申し訳ないが、今後何分頼む』と申込んだ。そこで木村氏も、『いやもう今日迄、君に対して言うことは皆言つて置いたのに、少しも用いぬので今回の如きことに至つたゆえ、最早、君に対して助言の口は持たぬ』と言つたところが、『いや、それでは困る、今日迄の自己の非を悟つて悔悟して頼むのだから』と言うので、『然らば僕の言う通りにするか』と言うと、承知したので、『先ずその衣服から更えるべし、その様な風をしていることがあるものか、(この当時は洒落た洋服かなんかでいた)第二には、君は到底規則的の学問では駄目だから、僕が紹介状をやるから、これを持って行って、一週間に何遍とか、お話でも聞いて学問せよ』と栗本鋤雲、元良勇二郎などという人達に紹介した。その後というものは島崎氏は断然服装を改める、栗本氏等の如きは、流石に老学者のこととて非常な教訓を与え

たので、島崎氏はその後も同氏が死ぬまで、教を乞うていた。然し明治学院などでは、氏の服装の急変したのを見て、気でも違ったのではないかと心配した程であったという。(後略)〔『神津日記(二)』〕。

この記事の信憑性であるが、神津猛は木村から聞いたことをその日のうちに書き留めたのであるから、彼に大きな記憶違いがあったろうとは考えられない。ただ相当の長話であったようであるから、細部については多少の齟齬があるかも知れないが、大筋は間違っていない。それを語った木村も嘘をつくような人柄ではないし、またこの場合には嘘をつく必要もないのであるから、彼の知るかぎりで事実を語ったのであろう。ただ相当の長期間にわたる藤村との交渉を短い時間の中で簡約して話したのであろうから、そのために生じる時間的な誤差はあり得ようが、それは内容まで歪めるものではない。とすれば、この記事は大体において信用できるものと断定してもよからう。

さらにこの記事の真実性を傍証するかと思われる事実もある。青山なを氏の調査によれば、明治二三年に藤村が木村を訪問した度数はそれ以前よりも著しくふえている(前掲書(二四))。この二三年は藤村が友人たちを避けて、いわゆる「仙人」的生活をしていた時期であるから、その時期に木村を訪問する度数がかえってふえたということは、その「仙人」的生活と木村との間に何らかの関係があることを示唆しているように受けとれる。また明治二五年四月一九日に藤村は木村宛ての手紙の中でこう語っている、——「小生儀先生御忠告被下候如く、目今の処にては栗本先生(漢文)田辺太一先生(支那現代文学)其他元良先生講話にも出で、漸々勉学の心組に御座候」(二五)。これは先の木村の忠告の、少なくともその一部が事実で

あることを裏書きするものであろう。ただそれにしては年月が大分ずれている。木村の談話によれば、藤村は二二年の落第の直後になされた木村の忠告に従って栗本や元良の教えを受けはじめたように受けとれるが、この手紙は、藤村が木村の忠告に従って栗本、田辺、元良の教えを受けはじめたのはこの手紙の日付である二五年四月からそう早くない時期であるように受けとれる書きぶりである。このずれはどう解釈すべきか。木村と藤村との交渉は相当の長期間にわたり、その間に木村は藤村に絶えず指導や忠告を与えていたらしいから、それを人に語る時、木村は一々年月を分けて説明することをせず(忠告の内容はいつも同じ趣旨のものであるから)、大ざっぱに二五年の忠告をも二二年の決定的な大戒告の中に含めて語ったのかも知れない。それとも、藤村は落第した時にこの忠告を受けてそれに従う気になっていたので、当時は明治学院に通学中であったし、卒業後も横浜で商売の手伝いをしたり、『女学雑誌』の仕事をしたりして、これを実行する暇がなく、ようやく生活が落ちついた二五年の春頃からかねての素志を実行したとも考えられる。その辺の事情は知る由もないが、木村の忠告を藤村が実行したことだけは確かである。とすれば、『神津日記』にあるあの記事の信憑性は一層高まるように思える。

けれども、あの記事がどれほど信用できるものであったとしても、そのために藤村自身が言う小倉の忠告が虚構であるということにはならない。木村といえども藤村の生活の全部を知っていたわけではあるまいから、木村の知らないところで小倉の忠告が行われたということは十分にあり得る。ただ前にも述べたとおり、その忠告がいつ行われたか、その判断に苦しむのである。それに、この忠告がいつ行われたにしても、あの記事がある以上、この忠告に藤村が

言うような決定的な意味をもたせることはできないように思われる。

次に残る疑問は、もしこの記事が信用できるとすれば、なぜ藤村はそれを黙殺して、小倉の忠告だけを取りあげたかということである。この疑問はそれほど解きたいものではなからう。藤村の自伝的告白小説である『新生』についてあの事件の当事者である「節子」こと長谷川こま子氏はこう言われる、——「あの小説は殆んど真実を記述してゐる。けれども叔父〔藤村〕に都合の悪い場所は可及的に抹殺されてゐる」⁽²⁾と。小説はもともと作りものであるから、一般的に言つてその種の作爲は咎めるべきでないにしても、あの告白小説『新生』にかぎつてそのような作爲は甚だしい汚点としなければなるまい。それなのに藤村はそれをしていふというわけである。さらに藤村は小説のみならず、自伝的叙述においても巧みに虚構をまじえる。青山なを氏はいま私たちが問題にしている木村熊二その人との関係についてそれを指摘される。氏は、藤村が『木村熊二翁遺稿』や『浅間の麓』の中で、母の遺骨を故郷に埋葬しての帰途、当時小諸に在任していた木村を訪ねたのが、小諸の土を踏んだ最初の時であると記しているのを、木村の日記と対照して、その虚構であることを立証し（藤村はそれ以前にも借金という、やはりかんばしからぬ用件のため小諸に木村を訪問しているのである）、——「藤村の自伝的叙述の中に、事実らしき虚構のあることを、私は肝に銘じてしたことである」⁽³⁾と強い語調で結んでおられる。藤村にこのような実績がある以上は、同じ木村熊二に關係のある自分の青年時代の豹変について同様の虚構を用いたとしても、驚くにあたるまい。

では、なぜ藤村はこの場合にそのような虚構を用いたのか、ある

いは、長谷川こま子氏の表現を借りれば、なぜ木村の戒告が藤村にとって抹殺しなければならぬほど「都合の悪い」ことなのか。それは恐らく高等学校の入試に落第したことがこれにからんでいるからではないかと推測される。『神津日記』における木村の談話によると、木村はそれまでに何度も藤村の「天秤棒」的態度を戒告したのであるが、藤村は一向にそれをうけなかつた。ところが急にその戒告を受けられて、態度を一変したのは、高等学校の入試落第を契機としてゐる。藤村は才気煥発でクラスでも首席を占め、その受験に際しても、——「いくら私でも高等学校位入れぬことはありませぬ」と言い切るだけの自信をもっていた。それが見事に落第したのであるから、その自負は粉碎されたことであろう。この打撃は大きく、前非を悔いて今後は木村の言に従うと誓ひ、また実際にもこれに従つて、人から気が違ったのではないかと言われるほどに態度を一変させたほどのものであった。彼は明治学院卒業後も帝国大学の選科を受験しようとして企てたのであるから、彼が高等学校——帝国大学というコースに強い執着をもつていたことは確かな事実であろう。それだけにこの受験失敗は根深いコンプレックスとして彼の心底に残つたものと推定される。彼は、小説とはいへ自伝にもひとしい『春』の中で、自分が夜店で草双紙を万引きしたこと⁽⁴⁾、級長選挙の時に自分で自分に投票したこと⁽⁵⁾、峰子「広瀬恒子」に對し男妾の心情にもひとしいと思ひながらもあえてあさましい無心状を書いたこと⁽⁶⁾などを告白し、しかも『幼き日』ではその万引きが事実であったこと⁽⁷⁾、さらには他人の置き忘れた錢を盗んだこと⁽⁸⁾をも告白している。入試の失敗はこのような破廉恥的行為ではない、人に隠さなければならぬような種類のものではない。ところが藤村はその破廉恥的行為をあえて告白しながら、入試失敗のこと

は誰にも語らず、自伝的小説の中でも一切押しかくしている。ということは、彼がそのためにどれほど深い屈辱を味わったかということを示している、と解しても間違っていない。彼は自負心が強かっただけに、それは堪えがたい屈辱だったのである。馬場孤蝶がどこからその落第の噂を聞き知り、藤村が二三年の新学期に再び登校しはじめた時、「天秤棒」から「仙人」に豹変していたのを見て、「高等学校の試験を通過し得なかった面目なさを覆ふ手段」と解したのも、あながちに見当はずれとは言えない。その豹変は木村の戒告によるものではあるけれども、同時にまた孤蝶のいう照れかくし的手段でもあつたらう。藤村が『桜の実』でこの豹変の原因を繁子なる非実在の女性との浮名に仮托したのも、この屈辱感を覆う手段であると思われる。長谷川こま子氏が言う「自分に都合の悪い場所」とは、この場合まさにこの屈辱であつたらう。それゆえに彼はこの屈辱にかかわる木村の戒告を抹殺して、それとかかわりのない小倉の忠告だけを取りあげたのであろう。

私がこのように青年藤村の豹変原因にこだわるのは、単なる実証的研究の興味からではない。この高等学校入試失敗が藤村の人間形成に深くかかわると思うからである。

藤村の豹変は単に服装上のことに止まらず、その勉学や人間関係にまで及んだ。彼はそれまで教室では華かに活躍して首席を占めていたのに、二三年の新学期に再登校してからは課業を怠り、卒業した時は「ビリから三番目ぐらゐ」(『桜の実』)あるいは「尻から二番目位」(『吾が生涯の冬』)であつたという。またそれまで社交的であつたのに、それ以後は友人を避けて口も利かなくなつたという。彼の豹変は木村の戒告によると先に断したが、木村はまさかそのようなことまで指示しはしなかつたであらう。ただ木村は――

「君は到底規則的の学問では駄目だから」と言つて栗本や元良に就いて学べと勧めた。木村が栗本や元良を推薦したのは、漢文学や心理学の大家としてでなく、立派な人格者としてであらう。それは――「お話でも聞いて学問せよ」という言葉にも、――「栗本氏等の如きは、流石に老学者のこととて非常な教訓を与へたので」という言葉からも伺える。つまり漢文学や心理学を重視してそれを栗本や元良から学べというのでなく、栗本や元良の人格に触れて自分の人格向上に資せよという意味であらう。木村はアカデミックな学問のかわりに、人間形成の学問を勧めたのであると思われる。木村が具体的に栗本や元良の名を挙げ、彼らに就いて学べと勧めたのは、藤村が高等学校の入試に落第した時か、それともその後二、三年たつてからのことかは明確に断定したいと先に述べたが、落第した時にも眞の学問は人間形成のためのものであるという趣旨のことをさとしたことは、その成りゆきからして推測される。藤村もこれに従つたのであろう。彼は学校の勉強(それはアカデミックな学問体系にもとづく学科の勉強である)を怠けはしたものの、学問そのものを怠つたわけではなく、他面ではしきりと図書館に通つて西洋の文学書などを読みあさり、――「今まで自分が思考して居たことは皮相に過ぎなかつたと思つて、文学とか宗教とかいふ方に心を潜めるやうになつて了つた」(『明治学院の学窓』)のである。彼が友人たちを避けたことについても、その理由は、小説『桜の実』によると、――「僕は自分の言ふことが気に入らなく成つて来た……一時はもう誰にも口を利くまいと思つた」といふのであり、馬場孤蝶の回顧によると、同趣旨ながらさらに詳しく、藤村は――「自分は人から才人だの、出過ぎ者だの言はれる、実際どうも人と話をすると、吾れ知らずお座なりのことを言つたり、自分のほんとうに思

つていない事を言ふやうに感じる。で、さういふことをいはいない様にするには人と一切話をしないに限る。さういふ風に思つたので〔下略〕^(三三)と話したと言う。つまり藤村は、他人に迎合して自分を失つていたこれまでの自分の在り方を反省して、深い自己嫌悪に陥り、眞の自分を確保するために孤絶という手段をとつたのである。もちろんこのような手段が有効であるわけではない。藤村もやがてそのことに気づき、——〔前略〕だからこれは人間に対しても、間違つたことをいはいない様な修業をしなければ、何の役にも立たない。だから自分はこれからは、人間に対して話をする際に、充分に要心して間違つたことはいはいない様にすべきであつて、自分が間違いない為に人を避けるといふのでは意味をなさない〕^(三四)馬場孤蝶前掲書^(三五)と考える。すなわち彼は自分に忠実であろうとする修業を志したのである。これを先に引用した「文学や宗教に心を潜めるやうになつた」とを結び合わせると、藤村はこの豹変を機に自己探究を始めたと言つてよいであらう。やがて彼のこの志向は具体的に近代的自我の探究となつた。後年彼は述懐して、——「要するに僕なぞが長い間かゝつて外国の言葉を学んだり、外国の本を読んで見たりしたのは、唯西洋を模倣する心からではない。何卒して触れて見たいと思ふものが有つたからだ。言つて見れば、まあ近代の精神だ——エスプリ・モデルンといふやつだね。何卒して、人として眼を覚ましたい、それが半生の学問の窮極の目的だつた」〔海へ〕^(三六)と云うのであるが、その端緒はまさにこの青年時の豹変にあるのである。

藤村はすでに明治学院に在学中からこのような意味で文学を志望し、卒業後は同志とともに『文学界』に拠つて文学作品を発表していたのであるが、その志向はまだそれほど強固なものでなかつた

思われる。それは三年ほど後に彼が一つの岐路に立つたことから分明する。それは『文学界』の同人たちが文学の創作から文学の研究や鑑賞に転じた時のことである。後に彼は当時を回想して、
「当時自分の周囲にあつた『文学界』の同人中では、北村透谷君は既に亡くなつて居た。私はあの友人の後を追つて、もつと心の戦を続けて行かうとした。私があゝの感想を書いたと同じ号に上田敏君も長い論文を出した。上田君は純然たるエキゾオチズムの立場から学芸の鑑賞を楽まうといふのであつて、上田君と私との出発点の相違が明瞭に感じられて来た。当時平田秃木君は私達二人の書いたものを読み比べて、自分はむしろ上田君の立場に賛成すると言はれた。上田君と私とはあの時すでに別の道を取つて歩き出した。氣質の分れ行くことは奈何ともすることが出来なかつたのである」
〔昨日、一昨日〕^(三七)と、割り切つた言い方をしているが、『春』によると、事情はそのように簡単ではなかつたようである。第一に上田敏や平田秃木が学芸の研究と鑑賞に転じたのは、単にその氣質によるだけのことでなく、彼らの時代認識がそうさせたのである。

——「聡慧^(三八)市川〔平田〕に言はせると、今は奈何いふ時世であるかを考へねばならぬ。十年二十年の後に成つても、見られるか奈何か解らないやうな青年の夢を、今が今見ようとしたところで、左様は世間が許さない。それよりは静かに学問でもして、傍ら芸術を楽もうではないか。それが遙かに高尚な生涯ではないか。斯う岸本〔藤村〕に説き聞かせた」^(三九)。この市川はすでにその一年以上も前から——「岸本君、君は奈何思ふね。吾儕はすこし早く生れて来過ぎたんぢや有るまいか」^(四〇)という認識をもつていた。この時代のずれは、市川たちだけでなく、同じ仲間の藤村にもあてはまつたはずである。現に藤村は——「ますます岸本は無口な人に成るばかりで

有つた。口に言へないことは、せめて文章に書いて表白まことばさうとした。彼は種々な文体を試みた。小説、戯曲、論文、それから新体詩までも試みた。一つとして自由に表白せるものは無かつた」(三)と言う。これは単にかつての恋人輔子の死による気落ちを言うのではなく、この文章が示すとおり、在来の文学形式では自己を表現できないという苦悩を語つたものであろう。この苦悩のあまり、彼は鹿野山を越える時、崖の上から石塊を落として、「もし石塊が河の中へ落ちるやうであつたら、文芸の道路を進まう。途中で止るやうであつたら、全く方向を変へて、他の職業の中に埋没もくもくれて了はう」(四)と思ひさえした。はては——「ある時などは、後れ馳せながらも友達の後を追はうとして、大学の選科に入る準備を始めたこともあつた」(五)とさえいう。それゆゑに彼が先に『昨日、一昨日』から引用した文章に言うほど割り切つて創作への志望を堅持しつづけたわけでないことは明らかである。それがともかくにもその志望を維持し得たのは、積極的には「心の戦」を続けようという願望によつてのことであろうが、消極的には、上田や平田と行動を共にしたくても、それができないという理由があつたと思われる。それは外面的には大学の選科に入る学資が調達できなかったということに原因するが、内面的には、高等学校から大学へと進んだ上田や平田らに比べて、自分は高等学校の入試に落第したという劣等感がそれを妨げたと推測しても、あながちに勘ぐりすぎとは言えない。彼がその落第のことを一言も言わないということは、それがそれだけ深く彼の心理の深層にわだかまつていたことを示す事実であると思われるからである。しかしこのコンプレックスは彼に幸いしたと言えよう。もし彼がアカデミックな学究の道をとっていたら、恐らく彼は上田や平田のはるかに後塵を拜する凡庸な一英文学者として終わり、後

のいわゆる文豪藤村は生まれなかつたであらうから。

高校入試の落第とそれに基づく木村の戒告とによる自覚が青年藤村を豹変させたことは前述のとおりであるが、それが決定的な効果を發揮したのは、それから数年後の小諸時代であると思われる。というのは、彼はその自覚にもとづき、文学を通して自己探究と自己形成を志したが、『文学界』時代、いかえればそのローマン主義的詩人の時代にはまだ才気に走る在来の習性を脱しきれないでいた。当時の藤村について平田禿木はこう言っている、——「藤村君にもこのプラスチックな天分があつて、それは早くから君の書き物に表れてゐるやうに思ふ。即ち、あの馬琴などの所謂換骨奪胎といふやうなことには実に妙を得てゐて、沙翁と読めばすぐ沙翁ばりの戯曲を書き——『文学界』の始めに出た『琵琶法師』や『朱門のうれひ』などはその例である」(『文学界前後』(三))。「プラスチックな天分」はそれ自身としては決して非難すべきものではない。人間は誰でも他人の影響を受けて生長するものであるから、「プラスチックな天分」はむしろ自己形成のために有利な資質と見なすべきである。ただそれがそうなるためには自主性が必要である。ところが当時の藤村にはその自主性がなかつた。後年、彼はみづから——「あの時分の僕は自分が何を書いているのだからよくわからなかつた。何ういふ風にすればいいのか、自分には分らなかつた。要するに、自分のものといふものを、何も持つてゐなかつたのだ」(『春』)と告白している(馬場孤蝶『明治文壇の人々』)。したがって、禿木は「換骨奪胎」などと賞めているけれども、それはむしろ露骨な模倣、翻案、盗用と言つて然るべきものである。馬場孤蝶は——「春」を見ると、△市川「禿木」といふ男は西洋料理を食つて反吐を吐い

たやうだ——かういふ有難い批評をある大家から頂戴したといつて市川は反りかへつて笑つて……∨と書いてあるのだが、僕が誰からか聞いた話では、紅葉が『文学界』の連中は西洋料理と日本料理を一緒に食つて反吐を吐いたやうなものだと言つたのである。成程これは當つて居る批評であらう。ところで平田君の所謂反吐は、西洋料理と日本料理が可成り融合していたのであるが、島崎君等始め僕等に至る迄もの反吐はその二つの料理が生そのまま出ていた趣が確かにあつたらうと思ふ」(前掲書²⁵)と言つているが、これは以上のことをみずから認めたものと言えよう。そして藤村がこのように自分で「自分が何を書いてゐるのだからよくわからない」やうなものにとにかくにも一つの作品にまとめ得、しかもそれが「いづれも皆絶讃を博した」(平田秃木『文学界前後』²⁶)のは(この「絶讃」は当時の文学界の幼稚さを示すもので、今日から見ると、それは筐底に秘められるべき習作といった程度のものであると思ふ)、もつぱら彼の才気によるとしなければなるまい。「プラスチックな天分」が自主性を欠く時、それは軽薄な才気ということになるであらう。

『若菜集』以後となると、もちろん事情は一変する。藤村はこの詩集によって自己の詩風を確立し、同時に日本の近代詩の出発点を画したというのが、世間一般の評価であり、そしてその評価は確かに間違つてはいまい。彼はもはやここでは「自分が何を書いているのかよくわからない」などとは言わず、「遂に、新しき詩歌の時は来りぬ」に始まるあの有名な『藤村詩集』序』に見るように、意気軒昂として近代詩の曙を宣言したのである。そこで彼は——「誰か旧き生涯に安んぜむとするものぞ。おのがじ、新しきを聞かんと思へるぞ、若き人のつとめなる。生命は力なり。力は声なり。声は言

葉なり。新しき言葉はすなはち新しき生涯なり」²⁷と言ひ、さらには——「芸術はわが願ひなり。されどわれは芸術を軽く見たりき。むしろわれは芸術を第二の人生と見たりき。また第二の自然とも見たりき」²⁸と言う。これによって見れば、彼は生活の革新を第一と考へ、詩歌の革新は生活の革新から生まれたもの、あるいはこれを証しするものと見ているように解せられる。現に彼はこれを裏書きするように、後にこの當時を思い出して、——「私の生涯はそこ『仙台』へ行つて初めて夜が明けたやうな気がした」(『改訂詩集の序』²⁹)、とか、「私が一生の曙は斯様な風にして開けて来た」³⁰とか「仙台の一年は私の一生にとつて夜明けのやうな静な、そして亦若々しかつた時のやうな気がする」(『何物をか吾生涯に与へし旅』³¹)と言う。

私は先に別の論文(『島崎藤村の思想展開』³²)で、藤村がその一生を通してひたすらに「近代の生活」すなわち自己に眞覚めた自由な生活を求めつづけたことを論証した。それが正しいとすれば、ここに彼が「新しい生涯」というのは、そのような意味での「近代の生活」であり、彼は仙台でそのような新しい近代的生活の少なくとも端緒を開いたということになる。けれどもそれは客観的な事実であつたらうか。

小説『春』によると、彼はそのような近代人の自由な生活を求めながらも、實際生活では前近代的な家族関係からくる精神的経済的な重圧に打ちひしがれ、——「私のやうなものでも、奈何して生きたい」という絶望的な嘆きとともに仙台へ出で立つたのであつた。ところが、その仙台では忽ち一転して新しい生涯の曙を迎えたといふ。とすれば、そこには何か画期的な転機があつたと考えられるわけであるが、そのような転機があつたやうな形跡は見出せない。た

だ仙台へ離れ去ったことよって彼は先の封建的家族関係の重圧から解放されて、ひとり身の自由な生活を楽しみ得たということだけは推察し得る。けれども、その自由な生活は彼が自分自身の精神の革新によつてみずから戦い取ったものではなく、たまたま次兄の広助が長兄一家のために経済的援助をすることにより、彼はその負担を免ぜられたからのものであった。これは、先には彼を重圧した封建的家族関係が今度は逆に彼を解放したということであり、従つて彼の享受した自由は決して近代的な自由といふものではなく、依然として封建制の枠内にあるものであった。それゆゑに彼がこれを「新しい生涯」の曙としたのは錯覚であり、そのことは彼のその後を描いた自伝的小説『家』がこれを実証している。『家』における藤村は封建的な「家」の中で呻吟していると言つてよいであらう。彼が仙台で享受したのは自由な生活というより、むしろ気楽な生活といった方が適當であらう。

もっとも、たとえそれが根本的には錯覚であつたにせよ、彼が仙台での生活に解放を感じ自由を楽しんだことは事実であり、従つて彼が後に「家」の束縛をさらに一層強く受けとめて苦悩する時、常にこの頃を思い返してそこに立ち戻らうとしたのも、無理はないと思われる。

が、それはあくまでも錯覚であり、従つてあの近代詩の宣言文には無理がある。佐藤春夫はそれを見抜いた。彼は先に引用した『早春記念』のあの有名な文章について、——「前に引用の藤村の言葉の命から力は普通の言ひ方であるが、力を声と飛躍して、声は言葉とまた普通の言ひ方で、『新しい言葉』は『新しい生涯』とまたしても一大飛躍をしてゐる。これは一見理論のやうな擬態をとつてゐるが、無論、理論ではなく、超理論のお筆先である。ニイチェが

『詩人は韻律の車によつて思想を運ぶ』と言つた時には幾分詩人に対する軽侮の情をそこに潜めてゐたらしいが、我々の若き詩人が『生命は力なり、力は声なり、……新しき言葉はすなはち生涯なり』と記した時には、鶴の羽ばたきにも似たこの言葉の調子の魔法によつてその思想を軽々と飛躍されて進々しい理論は下界に低く見ながら詩人にふさわしい自負をあらはしたこの思索のあとを求めたづねてその言ひ分の当否を判断する前にこの詩人の云ひ分を異議なく承認しようといふ氣になる」（『詩人島崎藤村評伝』^(註)）と評して、その非論理性を指摘している。これは、ほとんどすべての人々があつた『早春記念』の言葉をそのまま真に受けていることを思えば、実は鋭い洞察と言わねばなるまい。

もっとも、佐藤春夫は右の評言につづけて、——「それ故、事の当否はしばらく黙認して、ただこれを深く記憶に留めて置かう。藤村は力あり命ある言葉を即ち詩と観じたものらしい。寔に人の命から溢れ出た言葉と、それ故にまた逆に人の命の根もとまで辿りつくだけの作用のある言葉、即ち人の誠に充実した言葉——真言——命ある言葉を詩と観ずる事は、たとへ少々は単純ではあつても決して誤ではなく単純だけに健全な詩歌観と言つてよからう」（同上）と言ふ。これは、藤村のあの言葉を「超理論のお筆先」としながらも、その裏にひそむ真意を汲み取った、まことに情理をつくした批評と言えそうである。（もともと佐藤春夫は藤村によつて詩に導かれただけであつて、藤村の詩の長所を十分に理解し、しかも盲目的にこれを讚美することなく、鋭い洞察力をもつてその短所をも看破し、多くの論者の中でも藤村詩に対して最も公正な評価を下してゐると思われるので、以後はこの春夫の所論を念頭におきつつ、拙論を進めたい。）

『早春記念』における藤村の論述はともあれ、問題は藤村の実作が彼自身の詩歌観を具現しているかどうか、実際に彼の詩がそのような「人の誠に充実した命ある言葉」であるかどうか、それがどのような「新しき生涯」から発しているかということである。

多くの人々の見解によれば、藤村の詩は在来の封建的拘束を打破して個人の感情を解放した、その感情の解放は近代的な人間解放の出発点である、そこに藤村詩の社会的・文化史的意義がある、ということになっている。佐藤春夫もこれに賛同している(同上¹⁰⁶)。とすれば、藤村が——「新しき言葉はすなはち新しき生涯なり」と自負したのも、もっともと言わなければならぬ。彼はここに彼の求めていた新しい近代の端緒を開いたということになる。けれども、ここに人々のいう「感情の解放」とは真実なものであろうか。その感情とは本当に人間の心奥から発したものであろうか。

人々が藤村詩における「感情の解放」と言う時、その感情とは主として恋愛の感情を指すこととは言うまでもない。確かに藤村は、これまで劣情視され、あるいは罪悪視されていた恋愛をさまざまに美しく歌いあげた。すでに北村透谷は「恋愛は人生の秘鑰なり」と喝破したが、藤村はそれを詩によって人々の感情に訴え、一層深く人心に浸透させたとと言える。けれども私には、透谷の場合とは違って、彼の恋愛詩には切実さが乏しく、いわば観念の操作に終わっているように感じられる。

佐藤春夫は「果して熱情なりや」と題する一項目を掲げ、横瀬夜雨や北村透谷、与謝野晶子、吉井勇らと比較しつつ、藤村に熱情の欠如していることを指摘し、——「藤村の詩にこれと言って熱情迸るやうな篇什を見出す事はむづかしく全般にもそれが乏しいかの観がある」(同上¹⁰⁷)、「思ふに藤村は熱情の詩人たるには野性と蛮氣

とに缺けあまりに良識があり文字の礼節を知り過ぎてゐた。あの温雅典麗の詩風を見よ、終に熱情を盛るべき器では無い。自らなる破調一つだにない。『藤村詩集』に破調があればそれもみな意識から出た技巧であらう」(同上¹⁰⁸)と結論する。私も全くこれに同調する。

人々は佐藤輔子に対する藤村の恋愛を念頭において藤村詩を見、その恋愛詩はこの痛切な恋愛経験から生まれ出たものと速断しがちである。相馬黒光などはその代表であろう。黒光は——「あゝ、藤村さんはあの方〔輔子〕を失つてこの詩を得られた、これは恋と引かへの詩集」(『黙移』¹⁰⁹)としている。輔子に対する藤村の恋愛がどんなものであったかについて私は通説と異なる見解をもっているのであるが、それは別としても、『若菜集』と輔子との恋愛を直接結びつけるのは、先入観にとらわれた速断であると思う。もちろん両者の間には何らかの関係があるであろう。誰でも恋愛を歌う時、自分の過去の恋愛経験を離れて歌うはずはない。けれども藤村自身は——「客が女性に近づくための方便としたという岸本〔藤村〕の詩集は、作者たる彼に取ってはあべこべに女性の煩ひから離れた時に出来た若い心の形見であった。漸く彼も二十五才の頃で、仙台の客舎へ行ってそれを書いた。あの仙台の一年は彼が忘れることのない出来た楽しい時代である。ずっと後になってもよく思ひ出す時代である。そしてその楽しかった理由は、全く女性から離れて心の静かさを保つことの出来たからで。実際岸本は女性といふものから煩はされまいとして青年時代からその日まで歩き続けて来たやうな男であった」(『新生』¹¹⁰)と言う。これは小説の中の文章であるけれども、虚構と見なすべき理由はないから、藤村自身の心的事実と見てよいであろう。とすれば、『若菜集』の恋愛詩を彼の過去の恋愛

経験と結びつける根拠は崩れる。もっとも、——「詩歌は静かなるところにて思ひ起したる感動なりとかや。げにわが歌ぞおぞき苦悶の告白なる」(『早春記念』⁽²⁵⁾) という有名な彼の文章を援用して、『若菜集』は彼の過去の恋愛経験を想起し、昇華して詩としたものであるという解釈もあり得ようが、「女性の煩ひから離れて」という表現はそのような解釈を不相当とするし、またそのような解釈はむしろ情熱の冷却を暴露するものであろう。ドイツ語では情熱のことを *Leidenschaft* というが、その語はまた同時に「苦惱」を意味するし、英語の *passion* もまた同時に「苦惱」を意味する。それはこの両者に深い関係があるからであらう。全くのところ、「煩ひを離れて」は情熱も消え去るであらう。藤村は「女性の煩ひを離れて」と言うことによって、佐藤春夫が藤村には情熱が乏しいと言った評言をみずから裏書きしているように思える。亀井勝一郎は右に引用した藤村の言葉——「詩歌は静かなるところにて思ひ起したる感動なりとかや」の「静かなるところ」を単なる場所のことではなく、「沈黙の時間」を意味すると解して、この「沈黙」を強調するが⁽²⁶⁾、当時の藤村は「沈黙」の暇もなく、次々と詩を発表し、みずからも——「あの仙台雑詩を書いた頃のわたしはこう自己を鞭たうともしなかった。たゞ青春の溢れるまゝに任せてゐた」(『早春』⁽²⁷⁾)、「小さな経験がすべて詩となった」(『早春』⁽²⁸⁾)と言っているのだから。彼が自分を鞭つ手段として作ったという『夏草』でさえも一夏の間に書き上げた作品である。亀井の解釈は彼自身の思い入れが強すぎるように思われる。では、なぜ藤村は女性への情熱をもたないのに恋愛詩を書きついでのかという疑問が生じるであらう。が、その答は困難でない。女性の煩ひを忌避するということは、直ちに女性への関心をもたないということの意味しはしない。むしろ

忌避するのは、関心が強いからであらう。しかもその関心が情熱にまで燃えあがらないという事情が、かえってあのように技巧を存分に駆使する絶好の条件を作り上げたのであらうと思われる。

試みに藤村の実作を見てみよう。彼の恋愛詩はよかれあしかれ『若菜集』の巻頭に掲げられた「六人の処女」によって代表されるであらうが、人も知るように、この六篇の詩は閱歴境遇を異にする六人の処女の恋情を六通りに歌いわけたものであり、その構想や内容は全く空想的なこしらえごとであって、そこに恋愛の切実さは感じられない。言いかえれば、恋愛の情熱は伝わって来ない。藤村に同情的である佐藤春夫でさえこう言っている、——『おくめ』は藤村の作のなかで熱情的なもののやうに言はれて来てゐるものである。なるほどあれは思ひ切つて歌ひ上げた詩ではあらうが自分の考へる熱情的な詩といふものとは聊か違ふ。あれは熱情の觀念が歌はれただけで、歌ひ方は熱情的といふよりは寧ろ露骨ともいふべき作ではあるまいか。ただ露骨ながらに野卑ではなく品格のあるのを探りしするが⁽²⁹⁾。「熱情の觀念が歌はれただけ」という評言は、『おくめ』だけでなく、藤村のすべての恋愛詩にあてはまるであらう。けれどもこれは鑑賞の問題であり、鑑賞はあくまでも主観的であつて、客観的な立証とはならないから、これに深入りすることを避け、むしろ、間接的ではあるけれども、立証性のある客観的事実に戻らう。

藤村が、仙台においてだけでなく、その一生を通して、女性の煩ひから離れようと努めたことは、先に述べたとおりであるが、その努力は女性に対する侮蔑から発していたように思われる。——「私は下婢が傍へ来て楽しさうに歌ふみだらな流行唄などに耳を傾けて、氣を浮々とさせることを感じながら、一方には左様いふ子女と

碌に口も利かないほど彼等を憎み蔑視むやうな心を持って居ました」(『幼き日』(55))。これはそのような下卑に対する蔑視であるが、さらにそれが一般化されて、「女はすべて穢しい、など、幼稚な宗教的思想を持った時代でもないではなかったが……」(『春』(56))とか、「女の子——それは捨吉〔藤村〕に取って長いこと触れることを好まなかった問題だ。無関心が続けて来た問題だ——無関心はおろか、一種の軽蔑をもって対って来た問題だ」(『桜の実の熟する時』(57))となる。もちろんこのような軽蔑は、藤村が輔子に恋する以前のもので、輔子との恋愛は一時この軽蔑を解消させたであろうが、その恋愛が失恋に終わったために、それはむしろ却って——「彼が男女の煩ひから離れよう／＼としたのも、自分の方へ近づいて来る女性を避けようとしたのも、そして自分独りに生きようとしたのも——すべて皆一生の中の最も感じ易く最も心の柔かな年頃に受けた若い愛の経験に根ざしたのであった」(『新生』(58))のであり、さらに妻の冬子との結婚生活から得た経験も加わったことであろうが、後には彼はその女性蔑視を自分の性分と考えるようになっていて、「——多くの場合に岸本〔藤村〕は女性に冷淡であった。彼が一箇の傍観者として種々な誘惑に對って来たといふのも、それは無理に自分を制へようとしたからでもなく、むしろ女性を軽蔑するやうな彼の性分から来て居た」(『新生』(59))とか、「『本能と性慾とに支配され易く見える女性自身の内部にその深い眠りの源がある』(『婦人の目醒め』(60))などというひどい女性観を吐く。このような藤村が真に情熱をもって恋愛詩を書けるはずはないであろう。亀井勝一郎は藤村を「処女崇拜型の詩人」と規定したが(『島崎藤村論』(61))、氏は右のような藤村の文章をどう説明するのであるうか。

けれども、藤村の詩がそのように情熱の乏しいものであるとすれば、それが発表の当時から現在にいたるまで多くの愛好家をもつのはなぜかという疑問が残る。思うにそれは、彼らがその言葉の美しさと調子のよさに酔ったこと、言いかえれば、それは藤村の技巧による。先に、藤村は熱情の詩人ではないという佐藤春夫の評言を引用したが、彼はそれでもって藤村詩を貶しめているのでなく、別に、藤村を言葉の詩人として賞揚している。——「藤村を熱情の詩人では無く言葉の詩人であつたと呼ぶ事は、惟ふに至当でこそあれ、決して藤村を辱めるもの「で」はあるまい。蓋し熱情は詩の靈であり、言葉は詩の肉である。言葉は詩の肉体であるが決してその衣裳ではない。詩人とは所詮、言葉の人の謂ではあるまいか」(前掲書(62))。「言葉に酔うた果に言葉のまにまに生れ出づる熱情、藤村の詩的熱情は、さながら俳優が自分の演技のまにまに己の偽りの感情を実感として来るのに似てゐるのかも知れないと、かく断ずる事は別に詩人藤村の価値の問題とは関係もない。熱情は詩の重大な要素には相違ないが、その唯一のものではないから詩人はこれによつてのみ評価されるものではない」(同上(63))。「熱情から出た文字と、文字から生れた熱情とを区別する方法を知らないままに、自分はその何れをも同じく熱情と見る者である。一つを眞の熱情、一つを熱情の幽霊とは思はない。文字の間から熱情の陽炎を生れ出させる詩技を持つならば、これも亦立派に熱情の詩人と言ふべきではなからうか」(同上(64))。そして春夫はこの藤村のような言葉の熱情を「近代的な熱情」とさえ呼んで、高く評価する(同上(65))。このように藤村を言葉の詩人とする春夫の見解に私は全く同感であり、言葉の巧みな駆使こそは藤村詩の本領であると思う。

けれども私はこの「言葉の詩人」を春夫のように高く評価するこ

とはできないし、その評価を根拠づける春夫の論旨には錯誤があると思う。なるほど、詩人とは所謂「言葉の人」であらうし、熱情と言葉はまさに詩の霊と肉であって、両者を切り離すことはできない。けれども、いくら肉を豊かにしても、それで霊を作り出すこともできないければ、霊の代用をさせることもできない。春夫は俳優の演技を例証に用いているが、その解釈に間違いがある。この場合、演技を肉とすれば、霊は俳優がその扮する役になりきること、春夫の言葉を用いるなら、その役に「実感」をもつことである。その役になりきることから好演技が生まれるのであって、その反対ではあるまい。俳優がその役柄を「偽り」として自分との間に疎隔感をもっているかぎり、演技らしい演技が生まれるはずがなく、ましてその演技から実感が生まれることなどは考えられない。春夫は、実感を生み出す好演技はすでに実感を前提としていることを見落し、いわゆる「偽りの感情」を出発点としたのは、大きな考え違いであると思う。

藤村が「おえふ」を始めとする六人の処女を歌った時、彼はその処女たちになりきっていないどころか、その処女たちのイメージすら彼にはリアルでなかったように感じられる。後に藤村はパリで会ったある客人が——「今だから白状しますが、岸本君〔藤村〕の詩集では随分僕も罪をつくりましたねえ。考へて見ると僕も不真面目でしたよ。君の詩をダンに使って、何程若い女を迷はしたか知れませんかよ」と告白し、しかも——「その人はそよ／＼とした心地の好い風が顔を撫で通るやうな草原に寝そべて岸本の旧詩を吟じて居る若者を想像して見よとも言った。花でも摘まうとするやうな年若な女学生がその草原へ歩いて来ると想像して見よとも言った。風の持つて行く吟声は容易に処女の心を捉へたとも言った。そして其処

女が何事なにかも世間を知らないやうな良い身分の生れの人であればあるだけ、岸本の詩集が役に立ったと言った」(『新生』(三))と伝えてゐる。この客人の証言はまことに興味深い。まだ現実の恋愛を経験せず、いわばただ恋を恋する夢みがちな世間知らずの女性ほど、よけいに藤村の恋愛詩に惹かれたというのは、その恋愛詩の性格をよく表わしている。作者である藤村自身がまさにそのような女性と同じ心境であつたのであらう。(通説では、藤村は輔子との間に大恋愛を現実を経験したことになつてゐるが、私はその恋愛も右のような心境から出たものと解してゐる。その立証は別の機会に譲る。)先に引用したように、春夫が藤村には熱情でなく熱情の観念だけがあつたと言ふのは、この点から見ても、正しい洞察であると思ふ。周知のように、藤村詩には、よく言えば換骨奪胎、悪く言えば模倣、翻案、盗作が多く、比較文学(外国文学との関係だけでなく、日本の先行文学との関係をも含めた広い意味での)研究者たちに好箇の宝庫を提供してゐるのも、詩作の原動力たるべき情熱の欠如を示唆する事実であらう。にもかかわらず藤村詩が愛誦されるのは、繰返して言うように、そのすぐれた言葉の技巧によると解せられる。

ここで私は藤村詩について私の言いたいことを言い切つてしまいたい。情熱の乏しい技巧はまさに才気の産物である。『藤村詩集』時代の藤村は、明治学院初期の「天秤棒」時代ほどではないにしても、まだ才気に走る性癖を脱してはいなかったのである。

このことはやがて藤村自身もみずから認めるいたつた事実ではないかと思ふ。彼は小諸へ赴任する時の心境をこう語る。——『もつと自分を新鮮に、そして簡素にすることはないか。』これは私が都会の空気の中から脱け出して、あの山国へ行った時の心であつた(『千曲川のスケッチ』序(三))。この言葉を裏返せば、彼は小諸

以前の自分をマンネリズム化した虚飾の多いものと見なしていたということになる。当時同居していた兄の一家は、出京してからも旧家の因習と旦那意識を保持しつづけ、藤村がこれにひどく煩わされたことは、小説『春』に記されてあるとおりであるが、彼が「都会の空気のなかから脱け出して、あの山国へ行」こうと決心したのは、そのような周囲の雰囲気を出脱するためではなく、彼自身の生活意識の革新を志したためである。そのことは次の彼の言葉がそれを立証している。彼は小諸着任時の気持を——「何んとなく自分の内部には別のものが始まったやうな気がしました」（『千曲川のスケッチ』奥書）と述べ、さらにそれに続いて、——「これは後になつてからの自分の回顧であるが、それほどわたしも新しい渴望を感じてゐた。自分の第四の詩集を出した頃わたしはもつと事物を正しく見ることを学ぼうと思ひ立った。この心からの要求はかなりはげしかったので、そのためにわたしは三年近くも黙して暮すやうになり、いつ始めるともなくこんなスケッチを始め、それを手帳に書きつけることを自分の日課のやうにした」（同上）と記している。とすれば、その前はあまり「事物を正しく見」なかつたということ、言いかえれば事物をマンネリ的に見、虚飾が多かつたということになる。藤村がみずからそれを認めているということは、重要な事実である。

このような自慚は彼の詩の本領である技巧性から当然予期されることであるが、それが生じる所以を具体的に彼の作品について検証してみよう。第一に考えられるのは、その形式面すなわち韻律である。周知のように、彼の詩はどれも七五調ないし五七調であり、多少の例外はその破格という程度のものであつて、その基調をはずれてはいない。ところで、この七五調は、言うまでもなく、日本古来

の伝統的な詩律、極言すれば日本で唯一の詩律と云つてよいほどのものである。藤村詩が愛好されるのも、彼がこの詩律を用いたといふところに、その大きな原因があると思われる。何しろ私たち日本人は俗世間の標語にまで必ずと言ってよいほどのこの七五調を用いるのであるから。けれども、この詩律は私たちにそれほど親しいものであるだけ、その反面、新鮮味のないマンネリズムであることは否定できない。藤村詩は新しい詩想によつてこの陳腐な韻律を新しく生かしたところにその功績があるとされているのであるが、それもある限度があり、これを立てつづけに数多く読んでみると、その陳腐さが鼻につく。藤村もこれを自覚していたらしい。彼は最後の詩集『落梅集』に珍しく研究論文的な一文『雅言と詩歌』を載せ、そこでこの伝統的な韻律を論じ、——「かくのごとく吾国の歌人が芸術の心をとよめし作品のあとを眺むれば、代々の歌調相承け相伝へ、簡樸より精緻に古雅より繊細に、単純より複雑に赴きたる変遷のあとを見るといへども、遂に韻律の美をなすことを得ず、誠や支那文学の浸淫久しからずとせず、漢詩が国詩の精神を刺戟すること少なからずとせず、然るに吾国の歌人が律語特有の伎倆を振ふの余地少なくして、千載の久しき殆ど同一轍に出でたるは何ぞや。芸術として之を眺むれば、誇るべきところ少なき形式の外にせず、其の拍子を数ふるのみにて更に複雑なる賦法を成すこと能はざりしは何ぞや」云々。これは彼が自分でも七五調のマンネリズムにあきたらなくなつたことを意味する言葉であろう、彼はこのマンネリズムの原因を「雅言」の本質的な性格に歸し、——「われは以上の小研究を以て、和歌に韻律の美なかりし所以、又たその組織が複雑なる時代の感想と適合せざるに至りし所以の平生の疑問を解けりと言ふことを得ざれど、斯の如きは実に雅言の約束なることを述べて、聊かこ

れを読者に分つに過ぎざるのみ」と結び。そしてこれが彼にとつては詩との袂別の言葉となったのである。(ここでも彼は彼が言葉の詩人に過ぎなかつたことを遺憾なく暴露している。彼は韻律の問題を言葉の問題に帰着させるだけで、内在律というような内面的方向へ探求の目を向けることを知らなかつたのである。)

次に、藤村詩の形式面における韻律のマンネリズムが、その内容である詩想にも影響を及ぼしたのは当然のことである。彼の詩想は清新というのが一般の世評である。けれどもその詩集を一読すれば、たとえ国文学史の素人でも多少とも和歌史の知識をもつ者なら、誰でもすぐに伝統的な和歌の詩想、ことに古今集のそれを想起するのであろう。笹淵友一氏も——「古今集こそ『若菜集』の詩情を托すべき旧き革囊であつた」(『文学界』とその時代)とか、「『清しいかなや』『さびしいかなや』の抒情的表現はあまりに安易で和歌的表現のマンネリズムに堕ちた感があるが、序歌『秋風の歌』の詩情から推せば、この感傷的抒情性にこそ藤村の個性がある。(中略)尤も藤村詩の無内容をすべて和歌の抒情性に帰することは適當ではない。(中略)藤村詩の無内容は要するに藤村の詩的想像力の貧しさに原因してゐる。しかし藤村のこの個性が和歌的抒情性と無縁でないことも認めなければならない」(同上)と云い、それを実証するために古今集から数多くの先蹤歌を挙げておられる。そのような先蹤歌を具体的に指摘した研究はほかにも沢山あるから、それ以上新たに付け加える必要がないほどである。ただ私はそれに、陳腐の感をぬぐい得ないという印象を付け加えたい。藤村が援用した先蹤歌は、たとえば「鶯の涙もこほる冬の日に」(春の歌)の場合のように、大抵みな有名なものであり、かつ古今的特徴の強いものであるからである。藤村自身もやがてそれを自覚した

のであろう。小諸で書きはじめた小説(『旧主人』『藁草履』以下)や随筆(『千曲川のスケッチ』)は、そのような古今集の詩想と全く異なるものである。

以上は藤村詩の形式と内容とにわたつてそのマンネリズムを指摘したのであるが、次にその虚飾性を指摘したい。それにはまず第一に彼の頻用する対句的技法ないしは類句重複的技法をあげなければなるまい。彼はこれに随分と苦心したと見え、対句ないしは重複類句としては実に巧みに案配している。けれども対句もしくは類句の重複そのものが、本質的に言つて無内容な虚飾にはかならないと思われる。これを読誦する者はその口あたりのよさに調子づくであらうが、真に感動することはあるまい。それはそこに真実味が感じられないためである。一例を挙げよう。

身を朝雲にたとふれば
ゆうべの雲の雨となり
身を夕雨にたとふれば
あしたの雨の風となる

ひとりさみしき吾耳は
吹く北風を琴と聴き
悲しみ深き吾目には
色彩なき石も花と見き

(『草枕』より)

次に挙げたいのは彼の安易な詠嘆調である。彼は恥ぢかじげもなく大上段から「悲しいかなや」「さびしいかなや」とか、「さびしからずや」「悲しからずや」などという詠嘆詞を頻用する。が、それを読んで真に悲しみや淋しきを感じる者があるであらうか。必ず

しも詠嘆そのものが虚飾であるというわけではないが、彼のような調子のよい軽やかな詠嘆には真実味が感じられない。詠嘆は切実な現場を一步退いたところから生じる。その疎隔を埋めようとするためか、詠嘆はとかく大げさになり銚舌になりやすい。そこに虚飾が入りこむ。藤村詩の場合はまさにそうである。藤村の小説にも詠嘆は少なくないが、この場合の詠嘆は実に重若しく、彼の詩に見るような軽い調子のよさはない。両者を比較すれば、彼が自分の詩に虚飾を感じとったという推測が無理でないと知られよう。

詩の鑑賞や評価はひとひとによって違ふから、私が藤村詩について述べたマンネリズムや虚飾性に対しても、さぞかし異論が多かるう。けれども、彼が小諸赴任前の自分の生活と詩作とについて疑惑をもち、生活をもっと新鮮に、もっと簡素にし、事物をもっと正しく見たいと願ったことは確かな事実である。その願いに動かされて彼は小諸に赴任した。その当時彼にはほかにもっと有利な勤め口があったのに、あえて小諸義塾を選んだという。それは旧師木村熊二の恩誼に報いるためであると一般には解されている。けれども、これは単に師恩に報いるためでないことは、青山なを氏が紹介された熊二日記から推察される。それによれば、藤村はみずから小諸の土を踏んだのは木曾から帰京の途中に立寄った時が初めてであるように言っているが、実はそれ以前にも小諸に熊二を訪れ、しかもその時には熊二に借金の依頼をしているのである(きき)。とすれば、彼が義塾を選んだのはその借金に対する義理もあったのであらうと推測される。

けれども、それよりも重要な原因は、やはり彼自身の精神的状況にあったと推測される。彼は言う、——「わたしが七年の小諸生活も、その時の偶然な訪問〔明治三一年、木曾から帰京の途上に小諸

へ立寄ったこと〕が縁となり、一つにはまたそんな隠れたところで働いて居られた先生〔木村熊二〕の田園生活に心をひかれたからであつた」(『木村熊二翁の遺稿』(きき))。これはさりげない表現であるけれども、彼が当時自分の生活の革新を願っていたという背景と考へ合せると、意味深いものとなる。『力餅』では藤村自身も——「どうかして、もっと自分を新しくしたい。さう思つてゐるところへ小諸義塾の話がありまして、(中略)わたしは田舎へ退いてもっと勉強したいと心を決めましたから、報酬もすくなく骨も折れる小諸の方の学校を選びました」(きき)と言っている。しかもこれは単に都会の青年が田園に心をひかれたというだけでなく、そこには木村という人格の存在が大きな意味をもつように思う。木村はかつて藤村にその才走るのを戒め、自己の人間形成に努めるよう勧告して、彼に決定的な影響を与えた人物である。ところで、いま彼が志した生活の革新は、かつての木村の勧告をさらに徹底的に実行しようとするものほかならない。とすれば、彼の小諸行きは、彼がその木村の指導下で生活の革新を実現しようと考えてのことと見ても、無理な推測ではあるまい。

もっとも、藤村が小諸時代に木村からどのような指導を受けたかは明らかでない。彼はそれについてほとんど何も語っていないから。けれども、前に引用した『神津日記』によると、木村が藤村をどのような目で見ていたかは明らかである。したがって木村は、たとえ露骨な言葉によつてではないにしても、そのような見方でもつて藤村を遇したことであらう。

藤村は小諸で実際にその志した生活の革新を実行しようとしたと見てよい。収入が少なかつたたのもあらうが、その生活は新婦の甘い夢を破るような質実なものであつた。彼はみずから土を耕して

百姓の真似事をもした。土に足を着けた着実な生活を地で行くつもりでもあったろうか。創作面においても、新体詩壇の花形であった彼が、一冊の詩集を最後として筆を絶ち、その間に第一歩から新しく出直して、「事物を正しく見る」習練を始め、後に『千曲川のスケッチ』と題して発表したような観察記録を書きつけた。それは彼の詩集とはまるで違ったものであり、かつてのマンネリズムと虚飾とは影をひそめた。

文学史家はこの変化を、ローマン主義から自然主義への転換と言う。確かにそうであろう。けれどもそれは単なる文学思想の変化であるだけでなく、もっと深く人生観の変化、というより人間そのものの変化を意味する。藤村と言えば、その当否は別として、すぐに重厚な人格者というイメージが浮かぶ。このイメージは甚だ強力で、普通なら世間から葬り去られるほどの醜聞であるあの『新生』事件も傷にはならないほどのものである。けれどもこのイメージは藤村生来のものではなく、彼の少青年時の彼はむしろその正反対の軽薄才子であった。この軽薄才子が重厚で謹厳な人格者にならなうって行った最初のきっかけは木村熊二の戒告であり、その方向への決定的な踏み出しは木村の指導下における小諸の生活であった。木村はこの重大な変化に決定的な役割を演じたのである。

ところが、藤村はこの木村について語るところが案外に少ない。わずかに小文『木村熊二翁の遺稿』を書いたが、これはきわめて淡泊なものである。ただこの文章は木村の胸像建設がその機縁となつたのであるが、彼はその胸像の銘に「われらの父 木村熊二先生と小諸義塾の記念に」書いた。この銘は余人がその文案を作り、藤村はそれを揮毫しただけのことであるが（青山なを『木村熊二と島崎藤村』²⁶）、彼は他人の作ったこと文案「われらの父」に彼自身

の深い思いをこめて、これを書いたことであろう。が、それにしても、彼は木村のことを語らな過ぎる。彼が、僅かの期間の交わりに過ぎない北村透谷についてあれほど多くを語ったことと考え合せると、私が以上に述べて来たような藤村に対する木村の意味は、単なる私の妄想に過ぎないのではないかとさえ疑われもしよう。けれども、彼が木村のことを語りたがらなかつたのは、十分に説明のつく理由があったと思う。第一に、早く故人となつた透谷と違って、木村は長く生きながらえ（昭和二年没）、しかもその晩年は不遇であつたらしいから、現在のそのような人のことは書きづらかつたに違いない。が、それよりも重要なことは、もし木村のことを書こうとすれば、どうしても彼の戒告のことと書かねばならず、それを書くこととすれば、どうしてもその戒告に致命的な効果を与えた彼の高校入試落第のことに触れなければならぬ。ところがこの落第は、前に述べたように、自伝的作家としてインセストのような自分の醜聞をさらけ出しながら、ついに一生隠しとおした彼のコンプレックスなのである。このコンプレックスが禍いして、彼は大事な恩人である木村のことを語りたがらなかつたのではないかと想像される。

私は別の論文²⁷で、藤村が北村透谷をその近代的自我形成の導師とし、その破滅からの脱出路を亡父正樹の国学に求めたことを論述したが、そのような自我探求の方向に彼を向かわせたのは木村熊二であり、しかもそれに彼の落第が深くからんでいることを思うと、今更のように人生の奇しさに感慨が深い。

注

藤村の引用はすべて筑摩書房版『藤村全集』に拠った。ただし文中の旧漢字は現代漢字に改めた。他の引用文についても同様。

- 一 六一八七一頁以下。
- 二 六一四九七頁以下。
- 三 『近代文学鑑賞講座』六一二九三頁以下。
- 四 別一三六五頁以下。
- 五 別一三九〇頁以下。
- 六 別一三九三頁以下。
- 七 別五―四八五頁。
- 八 五―四三一頁以下。
- 九 五―四二九頁。
- 一〇 五―四二七頁。
- 一一 伊東一夫『島崎藤村研究』三二〇頁、青山なを『木村熊二と島崎藤村』（有精堂版『日本文学研究資料叢書―島崎藤村』三七頁以下）。
- 一二 六―四九九頁以下。
- 一三 別一七五八頁以下。
- 一四 青山なを前掲論文三八頁。
- 一五 一七―一六頁。
- 一六 長谷川こま子『悲劇の自伝』（婦人公論）昭和十二年五月号二八九頁。
- 一七 青山なを前掲論文四七頁。
- 一八 三―一三二頁。
- 一九 三―一三〇頁。
- 二〇 三―一二八頁。

- 二一 五―四一八頁。
- 二二 五―四一八頁。
- 二三 六―五二二頁以下。
- 二四 六―五〇二頁。
- 二五 六―八七頁。
- 二六 五―四八三頁。
- 二七 別一三九五頁以下。
- 二八 別三九六頁。
- 二九 八―一二三頁。
- 三〇 九―八七頁。
- 三一 三―一九九頁以下。
- 三二 三―一五二頁。
- 三三 三―一九七頁。
- 三四 三―一九七頁。
- 三五 三―二六頁以下。
- 三六 笹淵友一『「文学界」とその時代』八六一頁、筑摩書房版『日本文学全集』97―三三三頁。
- 三七 同右二五一頁。
- 三八 同右二〇五頁。
- 三九 一―三四三頁。
- 四〇 一―三四三頁。
- 四一 一―三四三頁。
- 四二 一―五二八頁。
- 四三 一―五二八頁。
- 四四 六―五三三頁。
- 四五 『信州大学教養部紀要第一号第八号』（昭和四九年三月）
- 四六 講談社版『佐藤春夫全集』一〇―一八〇頁。
- 四七 同右一八三頁。
- 四八 同右一八五頁。

- 咒 同右一八六頁。
 酉 相馬黒光『黙移』（法政大学出版局）六〇頁。
 壬 七一—五三頁。
 癸 一一三四三頁。
 三 龜井勝一郎『島崎藤村論』（講談社版『龜井勝一郎選集』五一—四頁以下。
 四 一一四五三頁。
 五 一一三六六頁。
 六 佐藤春夫前掲書一八五頁。
 七 五—四—四頁。
 八 三一四七八頁。
 九 五—五—四六頁。
 〇 五—三—一頁以下。
 一 七—四—三頁。
 二 九—一—〇一頁。
 三 佐藤春夫前掲書一八九頁。
 四 同右一八七頁以下。
 五 同右一八五頁。
 六 同右一八六頁以下。
 七 七一—五二頁。
 八 五—三—三頁。
 九 五—五—八七頁。
 〇 一一三—三〇頁。
 一 一一三—三九頁。
 二 笹淵友一前掲書七八五頁。
 三 同右一〇六七頁以下。
 四 一一一—七頁。
 五 青山なを前掲書四五頁以下。
- 庚 一三—三—六七頁。
 辛 一〇—四—八七頁。
 九 青山なを前掲書四九頁。
 〇 拙論『島崎藤村の思想展開』（前掲）。

Summary

The metamorphosis of Young Toson Shimazaki

Yoshio YOSHIMURA

As to Toson Shimazaki there is a popular image of a man of grave and serious personality. But in his young days he was a boy of frivolous talent. This remarkable metamorphosis was, according to my research, occasioned by an advise of his teacher, Kumaji Kimura, which obtained a decisive effect on him by his failure in the entrance examination of the Higher School, though Toson himself kept silent on both of these facts, and biographers also make no mention of them. According to this advise he began to proceed on the way of serious self-inquiry and self-building through literature.

But this metamorphosis was very insufficient yet. For his works during the years of "Bungakukai", even his poems in "Toson Shishu", which have been highly estimated in general, are, in my opinion, products of talent deficient of sincerity. There are reasons to infer that Toson himself also acknowledged this fact.

His metamorphosis was completed at Komoro. The motive that made him resolve to go to Komoro, was his intention to innovate himself under the old adviser, Kimura. It is inferred that Kimura played an important role for the completion of his metamorphosis, too, because it was nothing but the realization of the old advise of Kimura.

Historians of literature regard his change at Komoro usually as a literary conversion from Romanticism to Naturalism. But I apprehend it more radically as a metamorphosis of his personality itself, and his literary conversion as one of its results.